

出来秋も最終盤。間近に迫る烏海山と対峙(たいじ)するかのようになびえ立つカントリーエレベーター(CE)に、収穫した米が次々と運び込まれ、乾燥・調製の機械音がうなりを上げていた。

酒田市の農事組合法人「もとたて夢米(ゆめ)倶楽部(くらぶ)」は、1987年に建設された、このCEの利用者を中心に、その利用維持を目的に組織した作業班が始まり。その後、コンバインを導入し、稲刈りや直播(ちよくは)、堆肥散布などの作業を受託。特定農業団体「本榎フ

酒田市・もとたて夢米倶楽部

ーム」設立などを経て2016年1月に農事組合法人となった。

代表理事の堀俊悦さん(60)は「昔から米作りに夢を持つ篤農家が伝統的に多い地域。『夢米』の名もそこに由来する」と話す。

もみ殻を地元の養豚農家に提供し、できた堆肥を田畑に還元する本榎型循環農業を実践。「本榎の米」はJAを通して横浜の卸問屋に販売。V溝直播や無人ヘリコプター防除にも他に先駆けて取り組んできた。

現在、経営面積は約280畝、内訳は水稻約250畝(直播38畝)と大豆25畝

など。構成員は104人。16年にJAの園芸実証モデルハウス支援事業でハウス2棟を新設。今年からJA全農式ト口箱養液栽培システムでミニトマト「アンジエレ」の栽培も始めた。

堀さんは「70、80代で頑張っている人も多いが、いづれ法人が引き受けることも考えなければならぬ。第1次産業で経営が成り立つようにしなければ後継者は育たず、地域農業は維持できない」と語る。

掲げる経営理念には、組合員の所得増大を最優先にした力強い地域農業の構築と循環型農業の実践とともに

に、地域にある本榎三樹会の「百年の計は、人づくり」の教えにあるように、永続的な地域農業の人材育成に努める、とあった。

地域農業に百年の計



地域農業の未来に壮大な夢を描く「もとたて夢米倶楽部」のメンバー